天山井戸茶碗について

西田周平

はじめに

平成二十九年（二〇一七）十二月二十七日に、岐阜県高山市在住の陶芸作家長春天山（ちょうしゅんてんざん）が、京都紫野にある大徳寺孤蓬庵へ自作の天山井戸茶碗「晴山」を奉納した。これは異例の出来事であり、まさに歴史的な快挙といえよう。本報告では、この歴史的出来事である大徳寺への奉納に至った経緯と、奉納された天山井戸茶碗銘「晴山」（図一）と、最近窯出しされた「櫻嶋」（図二、個人蔵）について、提供していただいた資料を元に紹介していきたい。

一　長春天山について

天山は昭和二十四年（一九四九）福岡県小倉市に生まれた。「長春天山家傳陶歴」によると、かつて豊臣秀吉に仕え、慶長五年（一六〇〇）まで豊前小倉を領した毛利壱岐守吉成の末裔であると言う。長春天山はもちろん本名ではなく、雅号である。「長春」はかつて師事していた上野の陶芸作家十五代熊谷紅陽が、「天山」は飛騨高山に移住したのを機に、自ら付けたものである。江戸時代以降、城の構築や絵画・書・陶芸など、芸術的な仕事にて小倉藩主小笠原候の御用をつとめてきた亀屋の家に生を享けたためか、幼少の頃から絵画・書・篆刻・彫刻の修行を始めている。

昭和四十年（一九六五）十九歳の時に、近畿大学工学部を中退し、陶芸作家を目指して本格的な修行を開始し、在学中に心惹かれた「油滴天目茶碗」を追い求めて、はじめに京都で釉薬原料を扱っていた伊勢久商店の岩崎勇三郎に釉薬についての指導を受け、その後岩崎の紹介で熊谷に弟子入りした。油滴天目を追い求める中で、早くから穴窯で生じる窯変がもたらす美しさに気付き、自ら敷地内に数回窯を築き、以来穴窯での焼成にこだわって作陶している。しかし都会化した北九州での窯焚きに限界を感じ、昭和六十三年（一九八八）三十九歳の時に飛騨高山に移住した。その頃縁あって、室町時代の穴窯の図面を入手し、高山の敷地内にこれを復元、以来この窯でもって作品を作り続けている。翌年一月には復元した穴窯の初窯の様子が、ＮＨＫテレビ「窖窯に火が燃える」にて放映され、その収録中に赤い木葉天目茶碗を制作する旨を宣言し、他の陶芸作家より批判を受けたものの、平成三年（一九九一）に赤木葉天目茶碗「秋風」を完成させている。赤い木葉天目茶碗はそれまでに作例がなく、従前より不可能とされてきたものであった。

平成七年（一九九五）よりおよそ十五年間、当時東京国立博物館陶磁室長（現人間国宝美術館館長）であった矢部良明氏に指導を仰いだ。赤木葉天目茶碗の鑑定が縁である。矢部氏は「昨今のようにせち辛くなった御時世では、このような計算なしの生活を送る人と出会うことは、すっかり無くなってしまったので、大切な人種に属すると、いつも考えている」[①]と天山を評している。この間に猫掻き手長春青茶碗、茜雲茶碗、窯変辰砂茶碗を完成させている。また平成二十二年（二〇一〇）以降は、

昨年四月一日に逝去された林屋晴三氏に指導を仰ぎ、更なる高みを目指して修行を重ねた。林屋氏は晩年「流派を問わず、今を問う」ために、新宿柿傳において現代作家の作品を用いた茶会を定期的に催し、現代の茶の湯と茶道具の「あるべきやうわ」を模索されていた。

林屋氏は、平成二十八年（二〇一六）に刊行した図録「第一回　長春天山灰釉茶碗展」に一文を認めているが、その中で「私が例年新宿の柿傳の茶室で催している初釜に昨年から来るようになり、そこで使った光悦作の赤茶碗「大福」を手にして大いに感じることがあったらしく、独特の作振りの手づくねの茶碗に窯変した灰釉をかけた茶碗を昨年の秋に見せてくれた。釉景色と焼き締った土味、それに口造りと高台にも一風ある趣があり、ここまで来てくれたのかと大いに共感を抱いた。彼の窖窯による灰釉は魅力のあるものを生み出す窯であり、これからいい茶碗が生れてくることはたしかだ」と述べており、その後の制作に大きな期待を抱いていた様子がうかがえる。

天山は現在、近畿・中部地方の百貨店を中心に個展を開催している。矢部、林屋両氏に師事した関係で、彼はこれまで一度も公募展に出品したことはなく、百貨店における個展でのみ作品を発表している。これまでの制作のレパートリーを見ると、中国宋時代の油滴天目や木葉天目、朝鮮李朝時代の高麗茶碗、我が国の桃山時代の瀬戸黒茶碗・織部茶碗などの和物茶碗を範とした作品を数多く制作しているが、一方で茜雲茶碗・光輝茶碗など新たな茶碗も制作しており、今もなお自らの作陶の範囲を広げている。

二　天山井戸茶碗奉納のきっかけについて

そもそも天山が平成二十二年八月頃に、大徳寺孤蓬庵において国宝「喜左衛門」大井戸茶碗（図三）を手に取る機会を得たのは、それ以前に林屋氏が天山の邸宅に来訪した際、あらかじめ轆轤挽きしておいた百碗を見せたところ、その内四十六碗が林屋氏の眼に適ったためである。「喜左衛門」を前に、林屋氏より「天山ならば、かならずや、国の宝となる大井戸茶碗を完成する事ができよう。大徳寺に奉納せよ」と命じたことが、天山氏が大徳寺孤蓬庵に、自作の井戸茶碗を奉納するきっかけとなったのである。

井戸茶碗は高麗茶碗の中でも、古来より特別に尊重されてきたものである。江戸時代以降、大井戸、小（古）井戸、井戸脇、青井戸、小貫入などに分類しているが、「喜左衛門」は大井戸茶碗の代表作の一つである。やや開き気味に立ち上がり、胴部には轆轤目がよく残っている。堂堂とした風格がありながら、胴部や底部は光悦の茶碗のように非常に薄く造られている。胴部にある漆繕いも見所の一つとなっている。ゆったりとした轆轤であるが、一転して竹節状に削られた高台は力強く、釉薬が乖離してあらわれたざらついた土と、高台や高台際に不規則にあらわれた梅花皮が、何とも言えない不気味さを醸し出している。全体に掛けられた釉薬は美しい枇杷色を呈しているが、その上には黒みがかった雲があらわれている箇所もある。全体に細やかな貫入が入り、見込みを上から覗けば、まるで吸い寄せられるような感覚に陥り、底知れぬ深い井戸を覗くようである。中箱蓋裏の書付によれば、慶長年間に竹田喜左衛

門なるものが所持していたことが、銘の由来であるという。竹田喜左衛門の後は数人を経て、雲州松江藩主松平不昧公の所蔵となった。不昧の元には「喜左衛門」の他に、「細川」、「加賀」もあり、声価の高いこの三碗は「天下の三井戸」と珍重されてきた。この三碗すべてを所持することができたのは不昧公以外誰もおらず、明治以降の名のある数奇者でさえ、縁がなければ大井戸茶碗は手に入れることはできなかった。この茶碗を所持する者は腫物を患うという言い伝えがあり、不昧公も、この茶碗を受け継いだ月潭も腫物を患って死去したことから[2]、後に不昧公に縁のある大徳寺孤篷庵に寄進され、以来同寺に伝わっている。

天山はこの「喜左衛門」を実際に手に取って眺め、林屋氏より大徳寺孤蓬庵に奉納するよう言われた際、「喜左衛門」を超えるには、これに匹敵する高度な轆轤技と、「加賀」を超える釉景色、すなわち美しい枇杷色の中に五色の雲がたなびき、まるで桜花が咲いたかのような赤い斑点が浮かび上がるようなものが相応しいのではないかと考え、以後八年間大徳寺孤蓬庵への奉納を目標に井戸茶碗の制作を続けてきた。

三　天山井戸茶碗

「天山井戸」の銘は林屋氏によるものである。林屋氏は「第一回　長春天山灰釉茶碗展」図録に寄せた一文の中で、「また私が天山井戸と言っていいのではないかと云った井戸風の茶碗も、素朴さのなかに存在感がそなわってきて、一碗の茶をおいしく飲めるものになった」と、天山井戸茶碗に対する感想を述べている。この命銘について美術評論家森孝一氏は、第一冊目の天山井戸茶碗の図録に寄せた文章の中で、「現代作家の道具を組み合わせて、現代の茶に挑戦されてきた林屋先生だけに、現代の茶陶に対する眼は厳しい。この命銘は天山さんの井戸茶碗を『茶の飲める一碗』として、林屋先生が認めたということであり、これは奇跡に近い出来事と言ってもいいだろう」と述べている。

大徳寺孤蓬庵に奉納された「晴山」は、天山が「喜左衛門」を手に取って眺めた際に思い浮かべた、すべての条件を満たしたものである。しかしこのすべての条件は、揃うべくして揃ったものではなく、八年もの間に窯に入れられた数千碗の中で、偶然窯中で窯変が起こったために完成したものである。最初は思うような枇杷色に焼き上がらないために、美しい枇杷色に窯変する土を探すだけで、数年を費やしてしまったという。二年目に焼き上がった「開雲」、「開寿」、「淨雲」（いずれも個人蔵）の三碗が完成した際、林屋氏から「四百五十年間何人も完成できなかった大井戸茶碗をよくぞ作り上げた」という言葉を賜ったとのことであったが、いずれも枇杷色も薄く、また花も咲いていないことに満足できなかったため、これらは奉納しなかったという。これらが完成したしばらく後に、「旭雲」（図四、個人蔵）が完成した。この茶碗の特徴は、天山井戸茶碗でははじめて、高台部に自然の梅花皮（図五）があらわれたのである。

その後試行錯誤の末、ようやく美しい枇杷色があらわれた「晴龍」、「晴鳳」（ともに個人蔵）の二碗と、雲がかかった「貴龍」、「龍鳳」（ともに個人蔵）の二碗が完成し、さらにその後雲の中に美しい桜花のような赤い斑点があらわれた「衛山」、「井龍」（ともに個人蔵）の二碗も完成し

た。天山が理想とする井戸茶碗に必要な美しい枇杷色、五色の雲、そして赤い斑点が揃ってきたため、これらが一つの茶碗にあらわれれば、いよいよ大徳寺孤蓬庵へ奉納する運びとなるのだが、窯変は窯を焚けば必ず起こるものではなく、またどのように変化するかは、窯から作品を出すまではまったく分からないため、後は完成するまでひたすら窯を焚き続けるのみであった。そして八年目にして、ようやくすべてがそろった「晴華」（個人蔵）が、またその後に「靖山」（個人蔵）、「晴海」（図六、個人蔵）、そして奉納された「晴山」の三碗が同時に完成した。

「晴山」を観ると、やや赤みがかった枇杷色に、五色の雲がたなびき、見込みには桜花のような赤い斑点がいくつもあらわれている。天山井戸にみられる赤い斑点は、土中の石が爆ぜたことによって生じたものであろう。枇杷色の部分に注目すると、内側も外側も同じ箇所だけが枇杷色に変化しているため、これは高温の炎が直撃したことによって、土の色が変化したものであると考えられる。また五色の雲は、光の加減によっては色が変化して見えるように思われ、岩肌を思わせるような荒荒しさも感じ取れる。堂堂とした風格であるが手取りは思いの外軽く、「喜左衛門」を彷彿させるような、ゆったりとした轆轤である。天山井戸茶碗の制作に当たり、まず「喜左衛門」に肉薄するような轆轤引きを習得するために、井戸型の茶碗の制作に励んだ。この時期に制作された作品の中に井戸型のものがいくつも見られるのは、そのためである。光輝茶碗「瑞雲」（図七、個人蔵）、灰釉茶碗「水鏡」（図八、個人蔵）もその一つである。天山井戸に用いられている土は、泥のようなものであり、また細かな石も多く含まれているため、轆轤引きには一苦労であったという。「晴山」の銘は、師であった林屋氏に敬意を表して、名前の一字「晴」の字を入れたものである。蓋裏には「師匠林屋晴三先生共長春天山が八年間にて完成し大徳寺孤蓬庵奉納する也」と記している。窯変がもたらした神秘の茶碗であり、果てしない宇宙空間を彷彿とさせるのである。

天山井戸茶碗はすでに五十碗ほど制作されているが、最近窯出しされたものの一つが、「櫻嶋」と名付けられたものである。この茶碗は「晴山」に比べると、胴部・底部ともに厚く挽かれており、手取りはずっしりと重い。これは「喜左衛門」のような極限の薄さ・重さに、ことさらにこだわる必要はないと指導を受けたことによるという。おっとりとした轆轤で、胴部には轆轤目がよく残っている。「晴山」のような雲はあらわれていないものの、美しいやや赤味がかった枇杷色が全体にあらわれており、また胴部の一部には墨を吹き付けたかのような窯変（吹墨窯変）が生じている。土が赤く変化することは極めて珍しいことなのである。「喜左衛門」のような王者の風格や、「晴山」のような広大な宇宙を感じさせるような茶碗ではないものの、見様によっては、これから散りゆく満開の桜が持つ、刹那的な美しさが感じられるのである。天山の中では、今後天山井戸茶碗がどのような方向に向って行くのかは、まだはっきりと定まっていないというが、「櫻嶋」に代表される、やや赤みがかった枇杷色を呈した、素朴さと華やかさを兼ね備えた茶碗の登場は、天山井戸茶碗の新たな方向性を指し示しているように思われてならないのである。

おわりに

国宝である「喜左衛門」を手に取り、また多くの名碗を観てきた林屋氏の指導を受けたからには、国宝を超え、また歴史に残る茶碗を造らねばならないという強烈なプレッシャーの中で、必要以上に「喜左衛門」に囚われることなく、「火」の力、「水」の力、「土」の力、「木」の力をうまく借りることによって、自らの井戸茶碗を完成したことに敬意を表したい。かつて林屋氏は「富と名誉を求めずに、歴史に残るもの、国の宝となるものを造れ」と指導したというが、この天山井戸茶碗はまさにその言葉通りのものとなったように思われる。したがって天山井戸茶碗と「喜左衛門」は単純に比較することのできるものではなく、また比較することに意味はないように思われる。森氏も天山井戸茶碗の図録に寄せた文章の中で、「この代表碗（「晴山」のこと）と国宝「喜左衛門」大井戸茶碗を比較してみたところで意味をなさない。なぜならば、天山さんは天山さんの井戸茶碗を完成させたのである。だから貴いのであって、そこに天山井戸命銘の意味があるように思われる」と述べている。伝統的なものを制作する作家の中には、古の名碗をただ写すだけの作家や、あるいは名碗に自らの作為を重ね合せることで、自分なりの作品を生み出そうとしている作家がいるが、やはり単なる「写し物」は永久に「本歌」になることはなく、また必要以上に名碗に固執して誕生した作品が、結局その名碗には及ばないものであるとなると、その作品はもはや意味のないものとなってしまう。かつての名碗に学ぶべきことは数多くあれど、名碗の持つ世界から脱却し、心を自由に作陶することによって、現代に相応しい自分の茶碗が誕生するのではないだろうか。

天山井戸茶碗はすでに五十碗ほど存在するのだが、未だ公の場では発表されていない。近い将来天満屋デパートにおいて、「大徳寺奉納記念展」と題して天山井戸茶碗を発表する予定であるという。

注

① 矢部良明「長春天山さん　作陶三〇年を祝う」、図録『作陶三十年長春天山秀作七拾選展』、平成十年。

② 林屋晴三他『名碗を観る』世界文化社、平成二十四年、二一四頁。

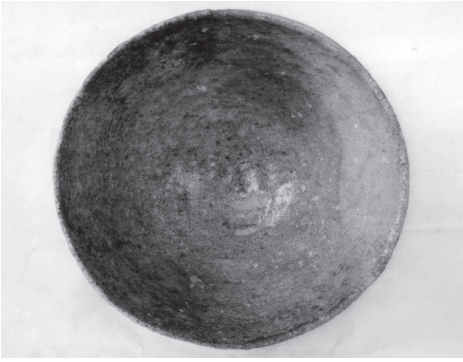
図版出典

図一、図二、図六　長春天山より提供を受けた。

図三　図録『桃山の数寄――茶の湯の名碗――』平成八年、愛知県陶磁資料館。

図四、図五、図七、図八　筆者撮影。

図版



図一　天山井戸茶碗「晴山」　大徳寺孤蓬庵蔵

図二　天山井戸茶碗「櫻嶋」　個人蔵

図三　大井戸茶碗「喜左衛門」　大徳寺孤蓬庵蔵

図四　天山井戸茶碗「旭雲」　個人蔵

図五　天山井戸茶碗「旭雲」　高台部

図六　天山井戸茶碗「晴海」　個人蔵

図七　光輝茶碗「瑞雲」　個人蔵

図八　灰釉茶碗「水鏡」　個人蔵